

研究ノート

楚漢戦争の展開過程とその帰結（下）

柴田 昇

The Historical Development and the Result of the Chu-Han War (Part2)

SHIBATA Noboru

4 彭城の戦いと漢の東方再進出

4-1 彭城の戦いと「五諸侯」

漢・五諸侯連合軍と項羽軍団が激突したのは、秦楚之際月表によれば漢二年四月のことである¹。漢が彭城に入ったことを知った項羽は、対斉戦線から離れて彭城に引き返し対漢戦を開始した。項羽本紀ではこの時項羽は諸將に斉を撃たせたとするが²、田儻列伝にこの部分を「斉を酈てて帰り、漢を彭城に撃つ」とするように、彭城奪還のために対斉戦線から撤退するための戦闘と見られ、実質的には対斉戦の放棄を意味するものだろう。漢軍と「五諸侯兵」との連合軍の総数は五十六万に達したという。これに対して項羽軍は三万にとどまったが、秦楚之際月表に「項羽以兵三万破漢兵五十六万」とあるように数で勝る敵に壊滅的打撃を与え、漢軍を壊走させた。彭城の戦いは数的に劣る西楚の圧倒的勝利に終わった³。

ここでふれておきたいのが、「五諸侯」とは何か、という問題である。「五諸侯」が具体的に何を指すのかについては諸説ある。近年の代表的な理解として、佐竹靖彦は「五諸侯」を既に漢が併合した地域の諸侯を指すとみて、雍・塞・翟・河南・殷の五諸侯に、漢の直轄統治下になかった友軍たる西魏王豹の軍を加えたものが彭城の戦い時点での漢陣営とする⁴。これに対して楯身智志は彭城の戦いに劉邦とともに参陣した諸侯を指すとし、五諸侯を韓・西魏・趙・代・斉とする⁵。また辛徳勇は、漢代以降の諸説を網羅的に提示した上で彭城戦前後の諸侯の動きを検討し、五諸侯を塞・翟・殷・魏・韓とする⁶。

佐竹は、趙・斉等のまだ漢によって併合されていない天下の諸侯が漢に統率されて彭城を襲撃したという見方の「背後にあるのは、劉邦こそが正統であり、初発から天下が劉邦を支持したはずであるという思い込み」⁷と述べる。これは、「項羽と劉邦の覇権闘争過程という一般的イメージに距離を置いて楚漢戦争を叙述する」⁸本稿の基本的スタンスからすれば傾聴すべき見解だろう。しかし楯身が指摘するように、佐竹の挙げる諸侯以外にも漢に与して彭城の戦いに出兵したと考えられる例が史料上見出されるのも確かである。また雍王はこの時期未だ漢に

服属しておらず、これを五諸侯に含めるのも疑問とせざるを得ない。以下、彭城の戦い前後の諸侯の動きを具体的に検討してみよう。

4-2 彭城の戦い前後における諸侯の動向

まず魏（西魏）に関しては、

漢王が蜀地から引き返して三秦を平定し、臨晋から渡河すると、魏王豹は国を挙げて漢王に味方し、そして漢王に従って楚を彭城で攻撃した。

漢王還定三秦、渡臨晋、魏王豹以国属焉、遂従撃楚於彭城。（魏豹彭越列伝）

との記事があり、秦楚之際月表・漢二年四月の項にも「従漢伐楚」とされるように、漢と手を結んで彭城の戦いに参戦している。彭越もこの時漢のもとに帰順して魏の相国になっており、魏は漢側について彭城の戦いに加わっていることは明らかである。

次に韓については、韓王信の列伝中に彭城の戦いに関する記事がなく、韓王信自身が彭城の戦いに参戦していたかどうかは確定できない。韓信盧綰列伝に「漢王乃立韓信為韓王、常将韓兵従」とあるように韓王信は基本的には韓兵を率いて漢軍に従っていたとみてよいが、彭城の戦いのような大事が列伝中に記されないのは不審である。しかし辛徳勇が指摘しているように、秦楚之際月表には韓が「従漢伐楚」したことは魏とともに明記されているので、韓軍が何らかの形で彭城戦に参戦したこと自体は疑う必要はないだろう⁹。あるいは、この時韓王信自身は彭城に赴かず兵のみ供出していたものか。

また、漢の敗戦後について『史記』は、漢との協力関係を解消しようとするもの、西楚との講和を目論むものが相次いだことを伝えている。高祖本紀では、

この時、諸侯は楚の強大と漢の敗走を目の当たりにして、みな漢から離れて楚の側についた。塞王欣は漢陣営から逃亡して楚に入った。

當是時、諸侯見楚強漢敗還、皆去漢復為楚。塞王欣亡入楚。（高祖本紀）

として、漢と連合していた諸侯が漢陣営を離れたことを記し、塞王欣が楚に降ったことを伝える。これと関連するのが次の記事である。

漢が彭城で敗れ撤退すると、塞王欣・翟王翳は漢陣営から逃亡して楚に降り、斉・趙もまた漢にそむいて楚と講和した。

漢之敗卻彭城、塞王欣・翟王翳亡漢降楚、斉・趙亦反漢与楚和。（淮陰侯列伝）

これによれば、彭城での敗戦によって塞王欣・翟王翳が漢陣営を離れて楚に降ったという。このことについて、『漢書』高帝紀上は次のように記す。

諸侯は漢の敗北を見て、みなその下を去った。塞王欣・翟王嬰は楚に降り、殷王卬は死亡した。

諸侯見漢敗、皆亡去。塞王欣・翟王嬰降楚、殷王卬死。

辛徳勇はこの『漢書』の記事を、塞王欣・翟王嬰・殷王卬が自ら兵を率いて漢に従っていた、即ちこれらが五諸侯に含まれていたことの根拠とする。塞王欣・翟王嬰については『史記』に

も関連記事が見られ疑う必要はないが、殷王司馬卬に関しては『史記』の関連記事中に見えず、諸侯の一人として参戦していたかどうか確言し難い。秦楚之際月表では漢二年三月に「降漢、(殷王) 卬廢」とあって、月表の漢元年八月に「降漢、国除」とされる塞王欣・翟王嬰とは異なっている。また殷王と同じ月表漢二年三月に「降漢」とされる魏王豹は翌四月の項に「従漢伐楚」とあるが、殷王については翌四月には「為河内郡、属漢」とあるのみである。前節でふれたように、殷王卬は、漢が三秦に侵攻したのと前後する時期に西楚と交戦状態に入ったが陳平によって再び項羽陣営に組み入れられ、そのあと漢により制圧されることになった、漢楚の間を揺れ動いた不安定な勢力であって¹⁰、漢側にとっておよそ信頼のおける存在ではなかった。

以上より、彭城の戦いの時点では殷王卬は無力化されていた可能性が高いと考える。本稿では、塞王欣・翟王嬰が封国を失いながらもある程度の軍団を維持し配下の軍団とともに彭城の戦いに参戦したのに対して、殷王卬は廢位の対象となりもはや軍事的に意味のある存在ではなくなっていた、すなわち殷王卬は五諸侯に含まれなかったと見ておく。

さて、先に引いた淮陰侯列伝によれば齊・趙も楚と和睦したという。この時期の齊に関しては、淮陰侯列伝の記事に彭城の戦いの前には「合齊趙共撃楚」、戦後には「反漢与楚和」とあることから、彭城の戦いに漢側の一員として参加していたと解されることがある。しかし齊は彭城の戦いが開始される直前まで西楚と対峙しており、項羽軍団が対齊戦を放棄して彭城に駆けつけた後も齊に対する西楚の防衛線自体が消滅したとは考え難く、齊は西楚と対立する立場をとりつつも彭城戦には直接参戦してはいなかった可能性が高い¹¹。淮陰侯列伝の記事は、それまで続いていた齊楚間の抗争が彭城戦を機にいったん鎮静化したことを述べていると見ておくべきだろう。

次に趙・代に関しては、この両国が代王陳余の圧倒的影響力のもとにあったと考えられることは上述した¹²。陳余は、趙王によって代王に立てられたが、趙王の弱体を見て代に赴かず趙にとどまっていた。陳余の動きについては張耳陳余列伝に、漢が対項羽戦に際して趙に共闘を呼びかけ、張耳の殺害を条件とした陳余に対して漢が張耳に良く似た首を送ることで陳余からの援兵を取り付けたとのエピソードが見える¹³。辛徳勇はこの時期の趙に関して、齊と同様に項羽を後方から攻めたに過ぎず彭城の戦いには直接には参戦していないとし、五諸侯に含めない。しかし齊の場合と異なり、趙・代はこの時点で西楚軍と直接交戦していたわけではない。張耳陳余列伝にも「遣兵助漢」と記されており、趙・代の軍は彭城に派遣されたと考えてよいように思われる。

以上、この時点までで王を称していた者たちの中で彭城の戦いに兵力が動員されたと見なし得るのは、魏王豹・韓王信・塞王欣・翟王嬰・趙王歇・代王陳余である。前節で述べた如く、齊は項羽に敵対する立場にあったことはあきらかだが、彭城の戦いに直接参戦していたとは考えにくい。ここまでの検討を踏まえるならば「五諸侯」との表現は、魏・韓・塞・翟に加えて趙・代を一体の政治的勢力とみなしての呼称と考えるのが妥当ではないだろうか。

4-3 漢の敗走と関中の拠点化

彭城の戦いに敗れた劉邦は下邑で周呂侯の軍を吸収し、碭・虞での滞陣を経て滎陽まで敗走する。滎陽で陣容を建て直した漢軍は西楚軍団を破り、項羽の西進を阻止する¹⁴。そして滎陽がある程度安定すると、劉邦は関中に退却し自国領域内の整備に取り組んでいる。

漢王は彭城で敗れて西に逃れ、……敗戦後に後の孝恵帝のみを見つけ出し、六月に立てて太子とし、罪人を大赦した。太子をして櫟陽を守らしめ、諸侯の子で関中に在る者は櫟陽に集められ防衛を担わされた。……ここにおいて祠官に天地四方上帝山川を祀らせることとし、時期を定めてこれを祀らせた。

漢王之敗彭城而西、……敗後乃独得孝恵、六月、立為太子、大赦罪人。令太子守櫟陽、諸侯子在関中者皆集櫟陽為衛。……於是令祠官祀天地四方上帝山川、以時祀之。（高祖本紀）

西楚との直接対決に大敗を喫した劉邦は、櫟陽の防衛体制を整え祭祀を整えるなど、関中の体制構築に着手した。秦楚之際月表漢二年六月に「王入関、立太子」とあるように、恵帝を太子に立てたのはこの時の関中撤退以後のことである。また、三秦領域内で抵抗を続けていた雍王章邯に対する殲滅戦が遂行されたのもこの時期である。漢二年六月に章邯は死亡し、翌月には隴西・北地・中地の三郡が置かれた¹⁵。漢の東方進出は、三秦領域内に敵対勢力を残存させたまの強引な軍事行動だったのである。

前章で指摘したように、楚漢戦争初期の漢は他国に比べて著しい侵略的傾向を見せている。彭城の戦いで大敗を喫する以前の漢は、三秦領域内の安定化を後回しにしてでも東方進出を優先する方針を採っていた¹⁶。換言すれば、彭城の戦い以前の漢にとっては、旧秦領域は未だ自らが拠って立つべき本拠地とは十分に認識されていなかったと考えられるのである。とすれば、この時期までの漢の東方進出は、三秦地域内の基盤が十分に整わないうちに戦線を東方に拡大しすぎてしまったものだったということになるだろう。

以後の劉邦の行動を見ると、東方の戦場で大きなダメージを負うといった関中まで退却してから再び東方の戦場へ向かうという動きが幾度かみられる。東方進出による郷里回帰を最優先課題としていた漢は、その課題を維持しつつ、関中地域を拠点化するという新たな課題を抱えることになった。彭城の戦いにおける大敗こそが、漢王権の関中拠点化の契機になったと評価できよう¹⁷。

以上、彭城の戦いで大敗した漢は、滎陽で項羽軍を食い止めるとともに、関中の体制整備に力を注ぐことになった。そして、廢丘で抵抗を続けていた雍王章邯を討ちその地域を郡に編成し、漢二年末頃から再び三晋地域への進出を開始する。

4-4 漢の東方再進出

漢軍が魏への侵攻を開始したのは漢二年八月のことである。魏王豹の動向について『史記』は次のように記録する。

三（二）年、魏王豹は謁見して親の病を見舞うため帰国することを請い、国に至るや河

津を断ち、漢を離れて楚の側についた。漢王は酈生を派遣して豹を説得させたが、魏豹は従わなかった。そこで漢王は韓信を派遣してこれを撃ち、大いにこれを破り、魏豹を虜とした。遂に魏地を平定し、三郡を置き、それらは河東・太原・上党といった。

三年、魏王豹謁婦視親疾、至即絶河津、反為楚。漢王使酈生説豹、豹不聽。漢王遣將軍韓信擊、大破之、虜豹。遂定魏地、置三郡、曰河東・太原・上党。(高祖本紀)

漢二年……その八月、韓信を左丞相とし、魏を撃った。……韓信は遂に魏豹を虜にし、魏を平定して河東郡とした。

漢二年……其八月、以信為左丞相、擊魏。……信遂虜豹、定魏為河東郡。(淮陰侯列伝)

魏王豹は彭城の戦いのあと漢との共闘関係を解消していた¹⁸。韓信を将として漢二年八月に魏に侵攻した漢は、九月には魏王豹を破り¹⁹、後九月に旧魏領域を郡化している²⁰。この一連の過程において劉邦は、魏王豹に対して必ずしも敵対的な姿勢を見せていない。劉邦は魏豹を攻め降伏させたが、その前にいったんは酈生を遣わして説得を試みている。さらに劉邦は自らの滎陽脱出の際には周苛らとともに魏豹に滎陽の守備をまかせている。漢王劉邦は魏王豹に対してかなりの配慮を見せ続けていると言ってよい。

またこの時期劉邦のもとには、陳余によって趙王位を追われた張耳が身を寄せていた。漢は張耳を支援し、漢二年末から三年初頭にかけて韓信・張耳を中心とする軍を派遣して趙を撃った。

韓信がすでに魏地を平定すると、漢は張耳と韓信を派遣して趙を井陘に撃破し、陳余を泜水のほとりて斬り、趙王歇を追撃して襄国で殺害した。

韓信已定魏地、遣張耳与韓信擊破趙井陘、斬陳余泜水上、追殺趙王歇襄国。(張耳陳余列伝)

漢二年……その八月……漢王は張耳・韓信をともに派遣して、兵を率いて東北に向かわせ趙・代を撃たせた。後九月、代の兵を破り、夏説・閼与を捕えた。……韓信と張耳は数万の兵を率いて、東進して井陘を下して趙を撃とうとした。……大いに趙軍を破り虜にし、成安君を泜水のほとりて殺害し、趙王歇を虜にした。

漢二年……其八月……漢王遣張耳与信俱、引兵東北擊趙・代。後九月、破代兵、禽夏説・閼与。……信与張耳以兵数万、欲東下井陘擊趙。……大破虜趙軍、斬成安君泜水上、禽趙王歇。(淮陰侯列伝)

漢三年十月、漢軍は、趙を破り趙王歇・代王陳余を殺害した²¹。この二国はいったん郡化される²²。趙王歇に関しては、陳余の傀儡的存在と認識されたためか、魏王豹に対する場合と異なって漢軍による特別な配慮が示されることはなかった。これによって戦国趙王家は政局から排除された。この時点で、斉を除いた旧戦国七国王家は政治的能力をほぼ喪失したものと考えてよい。

4-5 小結—漢二年末～漢三年初頭における諸国の動向

漢二年八月から三年十一月にかけて、東方再進出を開始した漢は三晋地域諸侯を短期間で打破した。漢三年十月に魏・趙・代を制圧した時点で、三晋地域はほぼ漢の勢力下に入ったことになる。

この時期の漢・三晋以外の諸地域に目を向けると、まず東方の斉は、彭城の戦いのあと田広を王に立て、田横が実権を握る。しかし田横専権下の斉は楚漢戦争期の政治的過程にほとんど関与していないようで、彭城の戦いの後しばらく『史記』にさしたる記録を見出すことができない。このことは斉が西楚とも漢とも直接的な関係を持たなかったことを示唆するものと考えられ、この時期の斉に関してはある程度の統一性を持った王権による地域的統合の進展があったとみるよりない。

燕についてはやはり文献上に記録は少ないが、淮陰侯列伝には趙制圧後のこととして、広武君の意見に従った韓信が使者を派遣したところ燕が従ったとの記事がある²³。漢三年初頭から春にかけてのいずれかの時期に燕王臧荼は韓信と、即ち漢との間に友好的な関係を築いたのである。淮陰侯列伝はこの燕の動きを「発使使燕、燕従風而靡」と記し、その記事はしばしば韓信が燕を服属させたものと解される。しかし、韓信軍は燕地に侵攻したわけではなく、以後の楚漢戦争の過程においても燕の存在感はきわめて希薄である。この時期の燕に関しては、楚漢抗争に直接かかわることなく漢との友好的関係を維持した状態で燕領域の政治的統合が進んだと理解しておく。

南方楚に関しては、彭城敗戦後に劉邦が隋何を九江に送り黥布を説得させたとの記事がみえる²⁴。九江王黥布は以後項羽と戦闘状態に入り、敗戦の果てに漢三年十二月には漢に帰順している²⁵。これらの記事は、漢二年末～漢三年初頭の楚域が紛争状態にあったことを示唆するものだろう。

彭城の戦いは漢側の大打に終わったが、項羽の進撃は滎陽で食い止められ、以後の個別的戦闘においては漢が必ずしも劣勢だったわけではない。そして漢三年十二月ごろまでの項羽は楚域内部の紛争解決に力を注ぐことになり、このことは漢の東方再進出を可能とする大きな要因になったものと考えられる。

5 楚漢抗争と梁・斉

5-1 漢三年正月～漢四年九月の楚漢関係

漢三年、三晋をほぼ制圧した漢は甬道を築いて滎陽周辺支配の安定化を目論んだ。それに對して、黥布を放逐し旧楚域の紛争状態を沈静化させた項羽は、再び對漢戦に力を注ぎ始めた。

漢は滎陽に駐屯し、甬道を築いてこれを黄河に接続し、敖倉の粟を運んだ。漢の三年、項羽はしばしば漢の甬道を侵奪し、漢軍の食糧は乏しくなった。漢は食糧不足を恐れて講和を求め、地を分かって滎陽以西を漢とすることを申し出た。

漢軍滎陽、築甬道属之河、以取敖倉粟。漢之三年、項王数侵奪漢甬道、漢王食乏。恐請和、割滎陽以西為漢。(項羽本紀)

漢は滎陽周辺に築いた甬道を項羽に奪われ、漢三年四月から包囲攻撃にさらされることになった²⁶。食料供給がままならなくなった漢は項羽との和議を模索するが、項羽に拒否される²⁷。この状況の中、周苛・樅公・魏豹に滎陽守備を任せた劉邦は、紀信の計により滎陽を脱出した²⁸。このあと魏豹は周苛らによって殺害され²⁹、戦国魏王家は政局から排除されることになる。

いったん関中に撤退した劉邦は再び東方への進出を目論むが、臣下の諫言に従いいったん南下して宛・葉方面に進み、九江王黥布と合流して兵を吸収する³⁰。これに対して項羽は自ら兵を率いて攻撃に向かうが、劉邦は壁中にこもり直接的戦闘には至らない³¹。

この時彭越軍が下邳で楚軍を破ったため、項羽は対漢戦線をいったん離れて彭越軍攻略のために東進した³²。項羽が戦線を離れた機会をとらえて、劉邦は北の成皋に移動する。

漢王はまた兵を引いて北の成皋に軍を進めた。項羽はすでに彭越を破って敗走させており、漢王が再び成皋に進軍したことを聞いて、再度兵を引いて西に進み、滎陽を攻略し、周苛・樅公を誅殺し、韓王信を虜にし、遂に成皋を包囲した。

漢王亦引兵北軍成皋。項羽已破走彭越、聞漢王復軍成皋、乃復引兵西、拔滎陽、誅周苛・樅公、而虜韓王信³³、遂圍成皋。(高祖本紀)

劉邦が成皋に入ると、短期間で対彭越戦を制した項羽は滎陽攻略を成功させ³⁴、成皋に劉邦を包囲する。項羽によって包囲された成皋から劉邦は北方に脱出し、脩武にて韓信・張耳の軍と合流、軍の直接指揮を執る³⁵。この時期彭越の梁地での軍事活動が活発化しており、食糧補給経路の分断を恐れた項羽が自ら再び対彭越戦に乗り出した。そのため脩武に拠った劉邦は渡河を志向したが、臣下の諫言に従い渡河を断念し河中に防壁を築いた。そして劉賈・盧縮を梁に派遣し、彭越軍と協力させることで項羽軍の動きを妨害しようとした³⁶。

これ以後の楚漢戦争情勢について、本紀は二つの大きなエピソードを伝える。第一は、項羽による一連の韓信軍・彭越軍対応である。漢四年二月、韓信が龍且らを破り斉王位に就いた³⁷。それを知った項羽は使者を送り、韓信に楚と結んで天下三分することを求めたが、拒否された³⁸。また項羽は彭越軍への対応のために曹咎らに成皋守備を任せ、東方に軍を移動した。

漢四年冬、項羽と劉邦が滎陽で対峙している間に、彭越は睢陽・外黄など十七城を攻め落とす。項羽はそれを聞くと、曹咎に成皋を守らせて、自ら東へ向かい彭越の下した城邑を取り戻し、それらの城邑は全てまた楚についた。彭越は兵を率いて北の穀城に逃走した。

漢四年冬、項王与漢王相距滎陽、彭越攻下睢陽・外黄十七城。項王聞之、乃使曹咎守成皋、自東收彭越所下城邑、皆復為楚。越将其兵北走穀城。(魏豹彭越列伝)

項羽は成皋包囲を大司馬曹咎に任せ、再度彭越攻略に向かい、陳留・外黄・睢陽を下した。この間に漢軍と曹咎以下の楚軍との戦闘があり、楚軍は漢に大敗する。曹咎が漢に破れたことを聞いた項羽は急いで取って返し、漢軍に囲まれていた鍾離昧を救出、漢軍は退却したという³⁹。

第二に、広武における長期にわたる楚漢の対陣がある。渡河し再び成皋に入った劉邦は、広武に布陣した。彭越軍を退けた項羽も広武に布陣し、両軍は数か月にわたって対峙することに

なった。本紀には広武で対峙する項羽と劉邦の間で行われた幾度かの問答が記録されている。項羽本紀では、項羽が漢王の父を煮殺すとして劉邦に降伏を迫ったこと、項羽が漢王に挑戦し単身戦場に出たことを伝えている。高祖本紀には、劉邦が項羽の十の罪を述べ怒った項羽の放った矢が劉邦の胸にあたったという有名な記事が見える。負傷した劉邦は、けがの悪化により成皋に入った後、けがが癒えてから入関、塞王欣の頭を市にさらし、然る後に再び広武に軍を進めている⁴⁰。

この時期には楚漢のどちらかが圧倒的に優位にあったわけではない。個別的な戦闘においては漢が勝利することも楚が勝つこともあった。この時期の項羽と劉邦は互いに勝ったり負けたりを繰り返していたと言うよりない。

5-2 齊・梁の動向

前節でもふれたように、この時期の楚漢戦争は二つの外的要因によって戦況が大きく左右されていた。

第一は、趙を制圧していた張耳・韓信軍団の動向である。趙制圧後の張耳・韓信に対して、楚はしばしば軍を送り、張耳・韓信はこれに対抗しつつ趙の諸城の平定を進め、また兵を漢に送っていた⁴¹。成皋脱出後の劉邦は、脩武で張耳・韓信軍団を掌握し、張耳に趙地の守備を命じ、秦楚之際月表によれば漢四年十一月には趙王に擁立した⁴²。そして韓信を相国として趙地の統治を補佐させ、さらに趙兵を用いての齊侵攻を命じた⁴³。

漢四年十一月ごろより韓信の軍団が東方進出を開始する⁴⁴。これに先んじて漢は酈食其を使者として齊に送っており、既に和平交渉はあらかじめ成立し、齊は漢軍への備えを解除していた。漢側の本来の方針は齊と結んでの対項羽戦の遂行だったのである。これに対して韓信は漢王の方針を無視した独断的軍事行動をとり、それによって東方齊政権は壊滅状態に陥る⁴⁵。これによって旧齊王家たる田氏も地域的基盤を失った。ただし田氏は戦国王族として以後も漢初まである程度の存在感を示し続ける⁴⁶。

漢四年二月、韓信が齊王となったが、齊王室滅亡及び韓信の齊王就位以後も曹參により齊残余勢力に対する掃討戦が続けられており、韓信の齊王就位と齊全土の平定は同一視できない⁴⁷。項羽は使者を送って韓信との間に同盟を結ぼうとするが、これは韓信に拒否される⁴⁸。漢は齊王となった韓信から兵を徴発しており⁴⁹、また高祖本紀に項羽が講和を受け入れた一因として「齊王信又進撃楚」とあり、楚漢講和実現の一要因として韓信軍の存在があったことが述べられる。韓信がこの時期に強大化していたことはしばしば指摘され韓信軍は漢に対して相当の自立性を有していた可能性が高いが、韓信は基本的に漢側に立つ姿勢を崩すことはなかった。しかし漢四年九月段階では、漢軍と韓信軍が連合して項羽軍に総攻撃をかけるような事態は発生していない。

第二は梁地を中心とする彭越軍の動きである。彭城の戦いのあと、彭越は魏王豹からは自立した行動をとり、北方に新たな根拠地を築いていた。そして漢三年の漢軍の東方再進出と連動

するように、梁の地で軍事活動を開始していた。

漢王が彭城で楚に破れ散り散りになって西に逃げると、彭越はかつて下した城邑全てを再び失い、独自に兵を率いて北に向かい黄河のほとりを根拠地とした。漢王三年、彭越は常に漢の游兵として出沒し、楚を攻撃し、楚の食糧補給路を梁地で切断した。

漢王之敗彭城解而西也、彭越皆復亡其所下城、独将其兵北居河上。漢王三年、彭越常往来為漢游兵、擊楚、絶其後糧於梁地。(魏豹彭越列伝)

項羽は幾度か対彭越戦を行っているが、彭越軍を個別の戦闘では破ることができても、壊滅させることはできなかった。そして彭越軍は梁地を中心に楚軍にダメージを与え続ける。

この時、彭越は兵を率いて梁の地におり、あちこちに出沒して楚兵を苦しめ、その糧食を断った。田横も（梁に）行って彭越に従った。

当此時、彭越將兵居梁地、往来苦楚兵、絶其糧食。田横往從之。(高祖本紀)

彭越は以後もゲリラ的活動を続け、鴻溝の講和以後においても、項羽軍を牽制しつつ劉邦軍の物資供給に寄与したとされる⁵⁰。ただし彭越軍が必ずしも常に漢に従属していたわけではないことには、ここで改めて注意しておく必要がある。先に引いた史料にあるように、韓信によって斉を追われた田横は彭越集団に合流しており、そのこと自体が彭越の漢に対する自立性を示唆している。その時のことを、田儋列伝は次のように記す。

田横は斉から逃れて梁に走り、彭越に帰順した。彭越はこの時梁の地におり、中立の立場をとり、漢に与したり楚に与したりした。

田横亡走梁、歸彭越。彭越是時居梁地、中立、且為漢、且為楚。

『史記』は彭越軍と項羽の関係について記すことに消極的だが、田儋列伝の記事は彭越軍が状況によって政治的位置を変えた、楚漢のいずれにつくこともあり得た勢力だったことを伝える。二十国分封時、項羽は西楚領域を梁地域を含む形で設定した⁵¹。そのため梁の回復を目指す彭越は西楚領域を主要な活動地域とすることになり、結果的に彭越軍は反項羽的な動きを見せることが多くなったものと思われる。漢四年段階までの彭越軍は漢に従属する集団では必ずしもなかったと考えるべきだろう。

5-3 小結—楚漢の和睦と諸侯の動向

楚漢が鴻溝を境界とする約を結んで和睦するのは、漢四年九月ごろのことである⁵²。楚漢講和直前の情勢に関して、項羽本紀は食糧不足を特記し項羽軍団側の不利を印象付ける記述を展開する。また高祖本紀はこの時期の項羽軍団が漢側の勢力に苦しめられていたことを強調する。梁では彭越軍の軍事活動が収まらず、斉の田横もそれに合流しており、さらに新たに斉王となった韓信が対楚戦を開始していたというのである⁵³。

しかし上述の如く、この時期には楚漢いずれかが圧倒的に優勢だったとは考えにくい。項羽本紀によれば、項羽は漢との講和に積極的ではなくここで講和を強く申し入れたのは漢の側だったという⁵⁴。また、鴻溝を境として東西に勢力圏を画定することによる和睦は、項羽にとつ

ては旧梁地域の確保を意味する。項羽の立場から見ればこの講和は、鴻溝を境に勢力圏を画定することで旧梁地域を含む西楚領域の確保を漢に承認させ、東方の韓信・彭越軍団と漢を分断するものだったと言えるだろう。この講和自体は必ずしも項羽の妥協の産物ではなかったものと考えることができる。

漢三年正月から漢四年九月にかけての楚漢戦争の具体的動向については史料的制約により明らかにできない部分が多いが、ここまで戦況を検討した限りでは、漢四年末段階ではこの時期の楚漢の優劣はさして明確ではない。またこの時期の漢が諸侯の盟主的な位置にあったかどうかも疑問である。燕・趙は漢・斉と友好的な関係を保っており、漢への援兵を行った可能性もあるが⁵⁵、『史記』には楚漢戦争への関与はほとんど記録されない。斉の韓信軍及び彭越軍はしばしば漢と共闘していたが、それによって戦況が漢側の圧倒的に有利に傾くことはなかった。そして韓信・彭越が必ずしも常に漢王の意向に従って動いているわけではなかったことは、漢五年に入って間もなく明らかになる。

6 項羽政権の崩壊

6—1 最末期の楚漢戦争（1）

楚漢の和睦は漢側から一方的に破棄され、以後戦況は急速に展開する。項羽本紀には以下の記事が見える。

漢五年、漢王は項羽を追撃して、陽夏の南に行き軍を止め、淮陰侯韓信・建成侯彭越と期日を約してともに楚軍を撃つこととした。しかし固陵に至っても、韓信・彭越の軍は来なかった。楚軍は漢軍を撃ち大いにこれを破った。漢王はまた城壁の中に入り、塹壕を深くして守った。そして張良に、「諸侯は約に従わないがどうしたものか」といった。張良がこたえるには、「楚軍がまさに敗れようとしているのに、信・越にはまだ封地が決まっております。来ないのも当然です。王が彼らと天下を分けることができれば、彼らはすぐにも参りましょう。それができねば、事が成るかどうかはわかりません。陳以東、海に至るまでを韓信に与えなさい。睢陽以北の穀城に至るまでを彭越に与えなさい。そしてそれぞれを漢のために戦わせれば、楚軍を破るのは容易でしょう」といった。

漢五年、漢王乃追項王至陽夏南、止軍、与淮陰侯韓信・建成侯彭越期会而撃楚軍。至固陵、而信・越之兵不会。楚撃漢軍、大破之。漢王復入壁、深塹而自守。謂張子房曰「諸侯不従約、為之奈何」。対曰「楚兵且破、信・越未有分地、其不至固宜。君王能与共分天下、今可立致也。即不能、事未可知也。君王能自陳以東傳海、尽与韓信。睢陽以北至穀城、与彭越。使各自為戦、則楚易敗也」。（項羽本紀）

鴻溝を境界とする約を一方的に反故にした漢軍は項羽軍を追撃したが、あてにしていた韓信・彭越の援軍がなく、固陵で敗退し壁中に籠ることになった。楚漢戦争最末期に至っても、個別的戦闘において楚漢の間に大きな差は見出されない。流動的な戦況の中で、韓信・彭越は様子見しつつ自立的な動きを見せている。劉邦が韓信・彭越軍の合流を実現したのは、張良の進言

に従い彼らと天下を分かちことを明言することによってである。漢は諸侯との協力なしには西楚と対抗し得ず、自立性をもった諸侯同士がごく緩やかな結合を成しているに過ぎない反項羽連合軍は、王位の保障なしには動員困難だった⁵⁶。

それでは固陵での敗戦及び張良の献策後の戦闘過程についてはどのように考えることが出来るだろうか。楚漢戦争の最終段階たる漢五年十月～十二月の過程については議論がある。通説的には、広く知られているように垓下（安徽省靈璧県）の戦いにおいて劉邦は項羽に最終的勝利をおさめたとされる。これについて辛徳勇は、「垓下」は文字の訛誤に属するもので垓下の戦いは存在しなかったとし、『史記』に見える「垓下の戦い」は「陳下の戦い」というべきとする⁵⁷。これに対して施丁は、「陳下の戦い」と「垓下の戦い」を別のものとし、前者を楚漢戦争の最終段階となる大決戦だったとみる⁵⁸。

楚漢戦争末期の戦闘過程について項羽本紀では、張良の献策以後の動向を次のように述べている。

使者が着くと、韓信・彭越ともに「今からすぐ兵を進めよう」と言った。韓信は斉から、劉賈軍は寿春から進み、城父を屠り、垓下に至った。大司馬周殷は楚に背き、舒の軍を率いて六を屠り、九江の兵を挙げ、劉賈・彭越に従ってみな垓下に会し、項羽に迫った。

使者至、韓信・彭越皆報曰「請今進兵」。韓信乃從齊往、劉賈軍從壽春並行、屠城父、至垓下。大司馬周殷叛楚、以舒屠六、拳九江兵、隨劉賈・彭越皆会垓下、詣項王。

また高祖本紀では、

（高祖は）張良の計を用いたので、韓信・彭越はみな来た。劉賈も楚地に入り、寿春を囲んだ。漢王は固陵で敗退すると、使者を送って大司馬周殷を招いた。（周殷は）九江の兵を挙げて武王を迎え、移動の過程で城父を屠り、劉賈や斉・梁の諸侯に従ってみな垓下に大会した。

用張良計、於是韓信・彭越皆往。及劉賈入楚地、圍壽春。漢王敗固陵、乃使使者召大司馬周殷。拳九江兵而迎武王、行屠城父、隨劉賈・齊梁諸侯皆大会垓下。（高祖本紀）

と述べる。本紀においてはこの時期の戦闘過程の大枠が示され、韓信・彭越らの諸将が城父の戦いを経て「垓下」に「会」「大会」したことが述べられている。「陳下」については本紀では触れられない。

6-2 最末期の楚漢戦争(2)

本紀中には「陳下」は見えないが、列伝・表の中には「陳下の戦い」を含める形で戦闘過程を述べるものがある。

（靳歙は）別動隊として河内に行き、……各地を攻略しつつ東進し、繪・郟・下邳等に進撃し、南進して蕪・竹邑に進んだ。項悍を濟陽近くで破った。そして軍をかえして、陳下で項羽を撃ち、これを破った。

別之河内、……略地東至繪・郟・下邳、南至蕪・竹邑。擊項悍濟陽下。還擊項籍陳下、

破之。(靳歙列伝)

項羽は東方に撤退した。(樊噲は)高祖に従って項羽を攻め、陽夏を下し、楚の周將軍の兵卒四千を捕虜とした。項羽を陳に囲み、大いにこれを破った。胡陵を屠った。

項羽引而東。従高祖撃項籍、下陽夏、虜楚周將軍卒四千人。囲項籍於陳、大破之。屠胡陵。(樊噲列伝)

また高祖功臣侯者年表には「(蠡逢)破項羽軍陳下、功侯、四千戸」との記事が見えており、項羽軍を漢軍が「陳」「陳下」で破った戦闘が存在したことは、これらの記事に明記されている。特に注意すべきは次の記事である。

(灌嬰は)漢王と頤郷(苦県)で会した。つき従って項羽軍を陳下で攻撃し、打ち破った。部下の兵卒が樓煩の將二人を斬り、騎將八人を捕虜とした。食邑二千五百戸を増封された。項羽が垓下で敗れて敗走すると、灌嬰は御史大夫として詔を受け車騎を指揮して高祖と別れて項羽を追撃し東城に至り、これを破った。部下の兵卒五名がともに項羽を斬り、皆列侯の爵を賜った。

与漢王会頤郷。従撃項籍軍於陳下、破之。所將卒斬樓煩將二人、虜騎將八人。賜益食邑二千五百戸。項籍敗垓下去也、嬰以御史大夫受詔將車騎別追項籍至東城、破之。所將卒五人共斬項籍、皆賜爵列侯。(灌嬰列伝)

灌嬰軍は、劉邦と合流した陳下で項羽軍を破り褒賞を得て、さらに項羽の垓下敗走後にはそれを追撃し項羽殺殺の実行者となっている。ここには「陳下」と「垓下」が別々に記されている。また灌嬰は、陳下の戦いの功績により二千五百戸を、垓下の戦い、項羽殺殺を経た高祖即位の際にはさらに三千戸を増封されている⁵⁹。二つの戦いの褒賞は区分されているようであり、この点から見ると「陳下の戦い」と「垓下の戦い」を別の戦役とするほうが理解しやすい。

6-3 最末期の楚漢戦争(3)

それではこの時期の戦闘過程についてふれる他の記事ではどのようになっているだろうか。関連史料を検討しよう。

漢五年、漢王は項羽を追って固陵に至り、劉賈をして淮河を南に渡らせ寿春を囲んだ。寿春から引き返してくると、楚の大司馬周殷をひそかに招いた。周殷は楚に反し、劉賈を助けて九江の兵を挙げ、武王黥布の兵を迎えた。みな垓下に会し、ともに項羽を撃った。

漢五年、漢王追項籍至固陵、使劉賈南渡淮圍壽春。還至、使人間招楚大司馬周殷。周殷反楚、佐劉賈舉九江、迎武王黥佈兵。皆会垓下、共撃項籍。(荆燕世家)

漢軍の別動隊だった劉賈は、寿春を包囲し楚の大司馬周殷を漢側に引き込んだ上で、黥布の兵を迎え入れ、これらとともに垓下に「会」している。韓信の場合も淮陰侯列伝に、

漢王が固陵で危機に陥った時、張良の計を用いることで、齊王韓信を呼び寄せ、かくして兵を率いて垓下に会した。

漢王之困固陵、用張良計、召齊王信、遂將兵会垓下。

とあるように、垓下に「会」したとされる。また彭越についても魏豹彭越列伝に、

漢王は彭越に使いを送り、留侯の策のようにした。使者が来ることで、彭越は兵をすべて率いて垓下に会することになり、遂に楚を破った。

漢王乃發使使彭越、如留侯策。使者至、彭越乃悉引兵会垓下、遂破楚。

とあって、垓下に「会」したことが韓信の場合と同様に特記されている⁶⁰。彭城での大敗のあと劉邦の謀臣たる張良が配下に加えるべきと劉邦に進言したことが『史記』に明記されているのは、まさに韓信・彭越・黥布の三名だった⁶¹。漢王を支えた勢力のうち後に王位を得た者たちが結集した場所が垓下だったと『史記』が認識していることは動かし難い⁶²。上記の諸史料では、「陳下」は劉邦とその配下の將軍たちが項羽軍を破った場所、「垓下」は諸侯が「会」「大会」し項羽に対する勝利を決定的にした場所として、明確に書き分けられている。

楚漢戦争終結後、高祖劉邦は自らが天下を取った理由について臣下に、一人の范増すら用いることが出来なかった項羽に対して個別の能力でいえば自分よりもはるかに優れた人物たちを用い得たことこそがその所以と述べている⁶³。この会話が交わされたこと自体の事実性を問うのは困難だが、前漢中期までにそのような事実認識と、多様な人物を自らのものに集め使いこなす能力こそが天下を取るための本質的な能力であるとの政治的な論理が形成されていたことは認めてよい。高祖は多くの有能な人物を結集し任用することで天下を取ったと認識されたのである⁶⁴。項羽本紀・高祖本紀が「垓下の戦い」を特筆するのは、黥布・韓信・彭越らを従え得たことこそが楚漢戦争における漢の勝利の本質的要因であって、劉邦が項羽に勝る決定的な一点が諸將を結集し得る人格的能力だったとの、『史記』の基本的認識に基づくものである。

以上より、筆者は「陳下の戦い」と「垓下の戦い」を別の戦役と見る見解に左袒する。「陳下の戦い」が項羽本紀・高祖本紀に記録されていないのは、そもそも本紀が個別的戦闘を網羅的に述べる意図を持っていないからだろう。『史記』は楚漢戦争を叙述する中で、張良の言として黥布・韓信・彭越の帰趨こそが楚漢戦争の結果を決めるとの認識を披歴し、劉邦が最終的に勝利した要因も人格的能力に基づく有能な人物の結集に求めている。陳下において著しい戦功を挙げたのは列伝中に「陳下の戦い」が明記されている灌嬰・靳歙のような劉邦配下の將軍たちに過ぎず、『史記』にとっては彭越・韓信らを最終的に結集し得た「垓下の戦い」の方がよほど重要だった。漢は垓下に諸侯を結集することで、ようやく反項羽連合軍の盟主たる実質を備えたのである。

漢は、陳下・城父で楚軍を破る。そしていわゆる垓下の戦いを経て、漢五年十二月、項羽は殺害される。秦楚之際月表は「誅籍」とのみ記している⁶⁵。

6-4 楚漢戦争の終結

項羽誅殺後も楚域の抵抗戦は続く。項羽の死で天下平定が成し遂げられたわけではない。上に引いた記事に続けて、灌嬰列伝は次のように記す。

長江を渡って、呉郡の長を呉下で破り、呉守を捕え、かくして呉・豫章・会稽郡を平定

した。引き返して淮北地域を平定すること、五十二県に達した。

渡江、破呉郡長呉下、得呉守、遂定呉・豫章・会稽郡。還定淮北、凡五十二県。

さらに絳侯世家には、

項羽が死んだ後、そのまま東に向かい楚地の泗川・東海郡を平定し、合せて二十二県を得た。

籍已死、因東定楚地泗川・東海郡、凡得二十二県。

とある。項羽死後の漢はさらに軍を進めて南方・東方の各地を制圧した。高祖功臣侯者年表は項羽死後に浙を都として自立し王を称した壮息なる人物の存在を伝える⁶⁶。また高祖本紀には灌嬰の楚地侵攻は「斬首八万」に達したとの記事もあり⁶⁷、項羽死後の楚地では王を称する勢力によるものも含めた大規模な抵抗戦がおきていたとみてよい。

これとは別に、漢と結ぶことを肯じなかったのが臨江王のケースである。項羽の死後も漢に従わなかった臨江王驩に対して、漢は盧綰・劉賈らに臨江国を攻略させた⁶⁸。秦楚之際月表によれば、漢三年八月に臨江王が代替わりし共敖の子の臨江王驩が立っている⁶⁹。そして月表によれば項羽が誅殺されたのと同じ漢五年十二月に臨江王は漢にとらえられ、その領国は漢の南郡となったという⁷⁰。これらを見ると、臨江王驩は項羽に従い反漢的立場をとっていたと解釈できそうだが、それにしては楚漢戦争中の臨江王驩の存在感は父の臨江王敖の場合と同じくあまりにも希薄である。臨江王驩に関しては、中立的立場をとっていたが呉芮における梅鋗のような存在がなかったため項羽と同列視され漢に反攻せざるを得なくなっていった存在と理解しておく。

これらに加えて、楚域が全て漢に服した後も抵抗を続けていた魯地域が降ることで⁷¹、ようやく楚漢戦争は終結し天下平定は成った。項羽死後も楚域及びその周辺地域での戦闘は続いている。これらの戦闘の詳細を明らかにすることは史料状況から困難だが、項羽死後の中国東南地域に漢を中心とするグループによる天下平定に抵抗し続けた勢力のかなりの広がりがあったことは明らかである⁷²。

6-5 小結—楚漢戦争期の歴史的意義

楚漢戦争最末期、漢は反項羽連合軍を結集し、項羽を殺害した。しかし、漢は楚漢戦争の最終段階においてようやく諸侯の集結を成し遂げ、それによって項羽を討ったのであって、漢自体が卓越した軍勢力を有していたわけではない。それではそのような状況の中で漢が諸侯の盟主と成り得た要因は何か。この問いに答えるためには、懐王の約の規制力を含めた複数のファクターを考慮しなくてはならないが⁷³、本稿で述べてきた楚漢戦争期の動向を踏まえて述べるならば、楚漢戦争期に発生した二つの現象はこの問題と深くかかわるように思われる。

項羽による諸国細分化・各国の軍事的規模の小規模化とそれに続く楚漢戦争の過程で、戦国七国の王族はほぼ無力化された。劉邦の魏王約に対する配慮に見られるように、旧七国王族の政局からの排除自体は漢の意図するところではなく、それは秦末～楚漢戦争期の混乱が生み出

した多分に偶発的な現象である。楚漢戦争の第一の歴史的意義は、戦国王権の最終的没落による王位就緒者の質的転換の実現だろう。楚漢戦争の終結により天下の平定状態が旧七国王権なしに再生することが明らかになったのである。その結果、新たな王には血縁的連続性において旧七国王家とほぼ無関係な者たちが早々に就位した⁷⁴。劉邦の皇帝就緒を可能とした要因の一つは、秦末～楚漢戦争期の動乱の中で発生した七国王権の最終的解体による、伝統的権威を保有する有力者の不在状況である。

また劉邦が諸侯の盟主となり得るには、もう一つの地理的要因があった。楚漢戦争期の諸侯領域内で戦乱を免れた地域は多くない。そしてその中で、漢の本拠地となった関中は、漢元年八月の三秦統一以来、雍王章邯の抵抗がしばらく続きはしたものの大勢としては戦乱を長期的に免れ続けた稀有な地域だった。劉邦は楚軍に大敗を喫したり重傷を負ったりして幾度か関中に退却したが、他地域の軍団がそれを追撃する状況はうまれなかった。

それに対して、三晋地域は一貫して主戦場であり続け、楚域も魏・斉との交界地域を中心に戦乱が絶えなかった。斉も、韓信による侵略を受けて以後は掃討戦の地となっていた。この時期に楚域以外の反項羽的立場をとった大規模勢力の中で、漢三年以降に本拠地が主戦場とならなかったのは漢・燕くらいのものであった。そして北方遠隔地に所在する燕が楚漢戦争の過程にほとんど関与し得なかったことをみれば、彭城の戦い以後の時期を通じて安定的な本拠地構築をなし得、なおかつ滅秦期以来の政治的過程の中で諸侯の盟主たり得る正統性に結び付くような功績を有する勢力は、戦国七雄の末裔がほとんど壊滅している状況下では、もはや漢のみになっていたことが見出し得よう。

しかし皇帝劉邦は楚漢戦争の論功行賞を一面的に行い得るような他に抜きん出た権力の保有者には成り得なかった。劉邦が直接行い得た論功行賞は、自らの同盟軍的存在の領袖に対するものと、それに準じる最側近の者たちに対するものに限られた。その結果王位は早々に決定され、功績抜群の少数の功臣に対する褒賞も早々に決定されたが、それ以下の功臣たちの論功行賞はなかなか進まないことになる⁷⁵。

別稿で述べたように、「他を圧倒し得る伝統的権威や軍事的優越性を自らが有していない状況下での天下平定状態へのソフトランディングこそが劉邦＝漢政権の切実な課題だった」⁷⁶。皇帝即位時の劉邦には他を圧倒する権威や軍事的実力などなかったし、最初期の漢王朝にも中国全土を統制し社会総資産の再分配を目論み得るような政治的力量は備わっていなかった。草創期の漢王権の前に広がっていたのは、長い戦乱状態に疲弊した広大にして無秩序な社会と半壊状態となった秦以来の政治的システムだったと考えなくてはならず、最初期の漢王朝はその最上層のみを自らの協力者・腹心たちで乗っ取った、いわば暫定的な政権に過ぎなかったのである⁷⁷。

7 おわりに

楚漢戦争は、二十国分立初期には相対的に有力な勢力だった項羽の西楚が、封建後の諸国再統合の進展の中でその軍事的優越性を失い孤立的な闘争を続ける一方、それ自体としては必ずしも最有力勢力とは言えない漢が諸勢力を最終的に糾合し反項羽連合軍の盟主たる実質を備えてゆく過程と総括できるだろう。項羽は諸国を従える霸王などではなかった。同じく劉邦も諸侯を従える天下の王者とは言い難い。劉邦は反項羽連合軍における当座の盟主に過ぎず、しかも楚漢戦争期を通じて安定してそのような位置にあったわけではない。本稿冒頭の問いに立ち返るならば、問われるべきは、項羽はなぜ天下統一できなかったのか、なぜ劉邦は天下統一できたのかではなく、劉邦集団程度のものが天下平定において主導的位置を占め得るような政治的環境とはどのようなものかなのである。本稿の叙述は、そのような課題意識を具体化するための一つの試みだった。

楚漢戦争の結果を規定した要因は複合的であり、またその過程には多分に偶発的な要素も存在した。本稿における検討より見出された、楚漢戦争の結果と漢王朝成立に結びついた要素は以下のように整理される。

- (1) 項羽の分封は、秦を滅ぼした六国連合軍の解体と、戦国諸国の細分化による諸国軍勢力の小規模化に結び付き、そのことが傑出した軍勢力の保有者ではなかった漢の躍進を可能としたこと。
- (2) 項羽の分封によって諸侯となった者たちの中で、漢は王の本来の出自と全く無関係な極端に遠い土地に封じられた唯一の勢力であって、おそらくはそのことによって漢は二十国中例外的に極端な侵略的性格を有する政権となったこと。
- (3) 彭城の戦い以後に本拠地がほとんど戦場にならなかった数少ない政権の一つが漢だったこと。
- (4) 秦末動乱と楚漢戦争の過程で、戦国期以来の伝統的王権がすべて没落し政局から排除されたこと。そのため圧倒的権威を有する王位候補者の不在状況が生じ、その結果、懐王の約の履行者として明解な功績を有する劉邦が諸侯の盟主に浮上り得たこと⁷⁸。

以上のような状況の中で、草創期漢王権は当座の盟主以上のものでなかった自らの性格をいかに恒久的な王者のそれに変質させていくかという新たな課題を抱えることになる。楚漢戦争終結後、漢は諸侯王対策に力を注ぎ続ける。そしてその一方で劉氏を特別な一族と位置付けるための試みも行われ始めたのではないだろうか。壊滅した旧七国王権に代わる新しい系譜的権威を自らの血縁的系譜上に構築する試みは漢王権の新たな課題となってゆく。

項羽の死に対して劉邦は大いに悲しみ、さらに項羽の一族に対して、

項氏の一族を、漢王はだれも誅殺しなかった。そして項伯を封じて射陽侯とした。桃侯・平皋侯・玄武侯は皆項氏だったが、漢の姓劉氏を賜うた。

諸項氏枝属、漢王皆不誅。乃封項伯為射陽侯。桃侯・平皋侯・玄武侯皆項氏、賜姓劉。（項

羽本紀)

との措置をとったという。項氏の多くが劉氏とされたのである。このような動きに戦国以来の名族たる項氏を劉氏の中に吸収しようとする意志を見出すのはいささかうがちすぎだろうか。

註

- 1 項羽以兵三万破漢兵五十六万。(秦楚之際月表・漢二年四月・西楚)
王伐楚至彭城、壞走。(秦楚之際月表・漢二年四月・漢)
- 2 春、漢王部五諸侯兵、凡五十六万人、東伐楚。項王聞之、即令諸將擊齊、而自以精兵三万人南從魯出胡陵。(項羽本紀)
- 3 漢王以故得劫五諸侯兵、遂入彭城。項羽聞之、乃引兵去齊、從魯出胡陵、至蕭、与漢大戰彭城靈壁東睢水上、大破漢軍、多殺士卒、睢水為之不流。乃取漢王父母妻子於沛、置之軍中以為質。(高祖本紀)
- 4 佐竹靖彦『項羽』(中央公論新社、2010) 394～397頁。
- 5 楯身智志『漢代二十等爵制の研究』(早稲田大学出版部、2014) 173～174頁。
- 6 辛徳勇「楚漢彭城之戰地理考述」(『歴史的空間与空間的歴史—中国歴史地理与地理学史研究』北京師範大学出版社、2013) 115～118頁。
- 7 佐竹靖彦『項羽』396頁。
- 8 柴田昇「楚漢戦争の展開過程とその帰結(上)」(『愛知江南短期大学紀要』44、2015) 15頁。
- 9 辛徳勇「楚漢彭城之戰地理考述」115～116頁。
- 10 柴田昇「楚漢戦争の展開過程とその帰結(上)」20頁。
- 11 この点に関しては辛徳勇の理解に従いたい。辛徳勇「楚漢彭城之戰地理考述」116頁。
- 12 柴田昇「楚漢戦争の展開過程とその帰結(上)」21頁。
- 13 漢二年、東擊楚、使使告趙、欲与俱。陳余曰「漢殺張耳乃從」。於是漢王求人類張耳者斬之、持其頭遺陳余。陳余乃遣兵助漢。漢之敗於彭城西、陳余亦復覺張耳不死、即背漢。
- 14 是時呂后兄周呂侯為漢將兵居下邳、漢王聞往從之、稍稍收其士卒。至滎陽、諸敗軍皆会、蕭何亦發關中老弱未傅悉詣滎陽、復大振。楚起於彭城、常乘勝逐北、与漢戰滎陽南京・索間、漢敗楚、楚以故不能過滎陽而西。(項羽本紀)
四月、至彭城、漢兵敗散而還。信復收兵与漢王会滎陽、復擊破楚京・索之間、以故楚兵卒不能西。(淮陰侯列伝)
- 15 引水灌廢丘、廢丘降、章邯自殺。更名廢丘為槐裡。(高祖本紀)
漢殺邯廢丘。(秦楚之際月表・漢二年六月・雍)
属漢、為隴西・北地・中地郡。(秦楚之際月表・漢二年七月・雍)
- 16 柴田昇「楚漢戦争の展開過程とその帰結(上)」23頁。
- 17 転換点としての彭城の戦いの歴史的意義については、藤田勝久『項羽と劉邦の時代』(講談社選書メチエ、2006)、楯身智志『漢代二十等爵制の研究』においても強調されている。

- 18 豹帰、叛漢。(秦楚之際月表・漢二年五月・西魏)
漢敗、還至滎陽、豹請帰視親病、至国、即絶河津畔漢。(魏豹彭越列伝)
漢二年……六月、魏王豹謁帰視親病、至国、即絶河関反漢、与楚約和。(淮陰侯列伝)
- 19 漢将信虜豹。(秦楚之際月表・漢二年九月・西魏)
- 20 属漢為河東・上党郡。(秦楚之際月表・漢二年後九月・西魏)
- 21 漢将韓信斬陳余。(秦楚之際月表・漢三年十月・常山)
漢滅歇。(秦楚之際月表・漢三年十月・代)
漢王乃令張耳与韓信逐東下井陘擊趙、斬陳余・趙王歇。(高祖本紀)
- 22 属漢為太原郡。(秦楚之際月表・漢三年十一月・常山)
属漢為郡。(秦楚之際月表・漢三年十一月・代)
- 23 於是信問広武君曰「僕欲北攻燕、東伐齊、何若而有功」。……広武君对曰「方今為將軍計、莫如案甲休兵、鎮趙撫其孤、百里之内、牛酒日至、以饗士大夫醢兵、北首燕路、而後遣弁士奉咫尺之書、暴其所長於燕、燕必不敢不聽從。燕已從、使諛言者東告齊、齊必從風而服、雖有智者、亦不知為齊計矣。如是、則天下事皆可図也。兵固有先声而後實者、此之謂也」。韓信曰「善」。從其策、發使使燕、燕從風而靡。(淮陰侯列伝)
- 24 使謁者隨何之九江王布所、曰「公能令布挙兵叛楚、項羽必留擊之。得留数月、吾取天下必矣」。隨何往説九江王布、布果背楚。楚使龍且往擊之。(高祖本紀)
漢三年、漢王擊楚、大戰彭城、不利、出梁地、至虞、謂左右曰「如彼等者、無足与計天下事」。謁者隨何進曰「不審陛下所謂。」漢王曰「孰能為我使淮南、令之發兵倍楚、留項王於齊数月、我之取天下可以百全」。隨何曰「臣請使之。」(黥布列伝)
- 25 布身降漢、地属項籍。(秦楚之際月表、漢三年十二月、九江)
- 26 楚囲王滎陽。(秦楚之際月表・漢三年四月・漢)
- 27 漢王軍滎陽南、築甬道属之河、以取敖倉。与項羽相距歳余。項羽数侵奪漢甬道、漢軍乏食、遂囲漢王。漢王請和、割滎陽以西者為漢。項王不聽。(高祖本紀)
其後、楚急攻、絶漢甬道、囲漢王於滎陽城。久之、漢王患之、請割滎陽以西以和。項王不聽。(陳丞相世家)
- 28 王出滎陽。(秦楚之際月表・漢三年七月・漢)
『漢書』高帝紀上では、漢王之滎陽脱出を五月のこととする。
- 29 周苛・樞公殺魏豹。(秦楚之際月表・漢三年八月・漢)
- 30 漢王出滎陽入関、収兵欲復東。……出軍宛葉間、与黥布行収兵。(高祖本紀)
漢王出滎陽、南走苑・葉、得九江王布、行収兵、得入保成皋。(項羽本紀)
- 31 項羽聞漢王在宛、果引兵南。漢王堅壁不与戰。(高祖本紀)
- 32 是時彭越渡睢水、与項声・薛公戰下邳、彭越大破楚軍。項羽乃引兵東擊彭越。(高祖本紀)
- 33 韓王信はいったん項羽の虜となったが、のちに項羽のもとから逃亡して漢に復帰し再び韓王位に就いている。

三年、漢王出滎陽、韓王信・周苛等守滎陽。及楚敗滎陽、信降楚、已而得亡、復歸漢、漢復立以為韓王。
(韓信盧綰列伝)

- 34 漢王四年、楚圍漢王滎陽急、漢王遁出去、而使周苛守滎陽城。楚破滎陽城、欲令周苛將。苛罵曰、若趣降漢王。不然、今為虜矣。項羽怒、烹周苛。(周昌列伝)

周苛らが楚軍の虜となるのは「周苛入楚」(秦楚之際月表・漢四年三月・漢)、「漢御史周苛入楚」(秦楚之際月表・漢四年三月・西楚)とあるように、漢四年三月のこととされる。しかし滎陽は高祖本紀に従うならば成皋包圍以前に陥落しているはずである。四年三月とあるのは周苛が殺害された時期を言うものか。あるいは、滎陽攻防戦が複数回ありそれらが混同されて記述されている可能性もあろう。秦楚之際月表の中には「王出滎陽、豹死」(秦楚之際月表・漢四年四月・漢)との記事もあるが、不詳。なお『漢書』高帝紀では周苛の入楚を漢三年六月の条に記す。

- 35 漢王得韓信軍、則復振。(高祖本紀)

六月、漢王出成皋、東渡河、独与滕公俱、従張耳軍脩武。至宿伝舎。晨自称漢使、馳入趙壁。張耳・韓信未起、即其臥内上奪其印符、以靡召諸將、易置之。信・耳起、乃知漢王来、大驚。漢王奪兩人軍、即令張耳備守趙地、拜韓信為相国、収趙兵未発者、擊齊。(淮陰侯列伝)

淮陰侯列伝には「六月」とあり、上述の過程と時系列的にうまく対応しないが、ここでは基本的には月表の記事に従いつつ本紀の記述を踏まえて仮に事項を排列した。

- 36 是時、彭越渡河擊楚東阿、殺楚將軍薛公。項羽乃自東擊彭越。漢王得淮陰侯兵、欲渡河南。鄭忠説漢王、乃止壁河内。使劉賈將兵佐彭越、燒楚積聚。(項羽本紀)

王得韓信軍、則復振。引兵臨河、南饗軍小修武南、欲復戰。郎中鄭忠乃説止漢王、使高壘深塹、勿与戰。漢王聽其計、使盧綰・劉賈將卒二万人、騎數百、渡白馬津、入楚地、与彭越復擊破楚軍燕郭西、遂復下梁地十余城。(高祖本紀)

漢四年、漢王之敗成皋、北渡河、得張耳・韓信軍、軍修武、深溝高壘、使劉賈將二万人、騎數百、渡白馬津入楚地、燒其積聚、以破其業、無以給項王軍食。已而楚兵擊劉賈、賈輒壁不肯与戰、而与彭越相保。(荆燕世家)

- 37 立信王齊。(秦楚之際月表・漢四年二月・漢)

齊王韓信始、漢立之。(秦楚之際月表・漢四年二月・齊)

- 38 楚已亡龍且、項王恐、使盱眙人武涉往説齊王信曰「……當今二王之事、權在足下。足下右投則漢王勝、左投則項王勝。項王今日亡、則次取足下。足下与項王有故、何不反漢与楚連和、參分天下王之。今釋此時、而自必於漢以擊楚、且為智者固若此乎」。韓信謝曰「臣事項王、官不過郎中、位不過執戟、言不聽、畫不用、故倍楚而歸漢。漢王授我上將軍印、予我數万衆、解衣衣我、推食食我、言聽計用、故吾得以至於此。夫人深親信我、我倍之不祥、雖死不易。幸為信謝項王」。(淮陰侯列伝)

- 39 漢果數挑楚軍戰、楚軍不出。使人辱之、五六日、大司馬怒、渡兵汜水。士卒半渡、漢擊之、大破楚軍、尽得楚国貨賂。大司馬咎・長史翳・塞王欣皆自剄汜水上。大司馬咎者、故蕪獄掾、長史欣亦故櫟陽獄吏、兩人嘗有德於項梁、是以項王信任之。……當是時、項王在淮陽、聞海春侯軍敗、則引兵還。漢軍方圍鍾離昧於滎陽東、項王至、漢軍畏楚、尽走險阻。(項羽本紀)

- 四年、項羽乃謂海春侯大司馬曹咎曰「謹守成皋。若漢挑戰、慎勿与戰、無令得東而已。我十五日必定梁地、復從將軍」。乃行擊陳留・外黃・睢陽、下之。漢果數挑楚軍、楚軍不出、使人辱之五六日、大司馬怒、度兵汜水。士卒半渡、漢擊之、大破楚軍、尽得楚国金玉貨賂。大司馬咎・長史欣皆自剄汜水上。項羽至睢陽、聞海春侯破、乃引兵還。漢軍方圍鐘離昧於滎陽東、項羽至、尽走險阻。（高祖本紀）
- 40 楚漢久相持未決……漢王項羽相与臨廣武之間而語。項羽欲与漢王独身挑戰。漢王數項羽曰……項羽大怒、伏弩射中漢王。漢王傷匈、乃捫足曰「虜中吾指」。漢王病創臥、張良強請漢王起行勞軍、以安士卒、毋令楚乘勝於漢。漢王出行軍、病甚、因馳入成皋。病癒、西入閿、至櫟陽、存問父老、置酒、梟故塞王欣頭櫟陽市。留四日、復如軍、軍廣武。閿中兵益出。（高祖本紀）
- 41 楚數使奇兵渡河擊趙、趙王耳・韓信往來救趙、因行定趙城邑、發兵詣漢。（淮陰侯列傳）
- 42 趙王張耳始、漢立之。（秦楚之際月表・漢四年十一月・常山）
- 43 漢王奪兩人、即令張耳備守趙地、拜韓信為相國、收趙兵未發者擊齊。（淮陰侯列傳）
- 44 漢將韓信破龍且。（秦楚之際月表・漢四年十一月・西楚）
漢將韓信擊殺廣。（秦楚之際月表・漢四年十一月・齊）
- 45 信引兵東、未渡平原、聞漢王使酈食其已說下齊、韓信欲止。……遂渡河。齊已聽酈生、即留縱酒、罷備漢守禦信因襲齊歷下軍、遂至臨菑。齊王田廣以酈生賣己、乃亨之、而走高密、使使之楚請救。（淮陰侯列傳）
漢將韓信引兵且東擊齊。齊初使華無傷・田解軍於歷下以距漢、漢使至、乃罷守戰備、縱酒、且遣使与漢平。漢將韓信已平趙・燕、用蒯通計、度平原、襲破齊歷下軍、因入臨淄。齊王廣・相橫怒、以酈生賣己、而亨酈生。齊王廣東走高密、相橫走博（陽）、守相田光走城陽、將軍田既軍於膠東。楚使龍且救齊、齊王与合軍高密。漢將韓信与曹參破殺龍且、虜齊王廣。漢將灌嬰追得齊守相田光。至博（陽）、而橫聞齊王死、自立為齊王、還擊嬰、嬰敗橫之軍於贏下。田橫亡走梁、歸彭越。（田儻列傳）
- 46 後歲余、漢滅項籍、漢王立為皇帝、以彭越為梁王。田橫懼誅、而与其徒属五百余人入海、居島中。（田儻列傳）
九年、……徙貴族楚昭・屈・景・懷、齊田氏閿中。（高祖本紀）
- 47 韓信為齊王、引兵詣陳、与漢王共破項羽、而參留平齊未服者。（曹相國世家）
- 48 項王聞淮陰侯已举河北、破齊・趙、且欲擊楚、乃使龍且往擊之。淮陰侯与戰、騎將灌嬰擊之、大破楚軍、殺龍且。韓信因自立為齊王。項王聞龍且軍破、則恐、使盱台人武濊涉往說淮陰侯。淮陰侯弗聽。（項羽本紀）
項羽聞龍且軍破、則恐、使盱台人武濊涉往說韓信。韓信不聽。（高祖本紀）
- 49 遣張良往立信為齊王、徵其兵擊楚。（淮陰侯列傳）
- 50 漢五（四）年秋、項王之南走陽夏、彭越復下昌邑旁二十余城、得穀十余万斛、以給漢王食。（魏豹彭越列傳）
- 51 項羽自立為西楚霸王、王梁・楚地九郡、都彭城。（高祖本紀）
- 52 太公・呂后歸自楚。（秦楚之際月表・漢四年九月・漢）
- 53 当此時、彭越將兵居梁地、往來苦楚兵、絕其糧食。田橫往從之。項羽數擊彭越等、齊王信又進擊楚。項

- 羽恐、乃与漢王約、中分天下、割鴻溝而西者為漢、鴻溝而東者為楚。(高祖本紀)
- 54 是時、漢兵盛食多、項王兵罷食絕。漢遣陸賈說項王、請太公、項王弗聽。漢王復使侯公往說項王、項王乃与漢約、中分天下、割鴻溝以西者為漢、鴻溝而東者為楚。項王許之、即歸漢王父母妻子。軍皆呼万歲。(項羽本紀)
- 55 『漢書』高帝紀上には「北貉・燕人来致梟騎助漢」とある。
- 56 楯身は、劉邦が項羽を破ることが出来た理由を「集団外の独立諸侯を味方に引き入れることに成功したため」とし、「そのために劉邦が採った手段こそ王の封建なのであり、彼は諸侯を王に封建してその領土を保障・安堵してやることで、彼らの協力を取りつけていた」と指摘する。楯身智志『漢代二十等爵制の研究』151頁。
- 57 辛徳勇「論所謂“垓下之戰” 応正名為“陳下之戰”」(『歴史的空間与空間的歴史』北京師範大学出版社、2013所収)。佐竹靖彦も基本的にこれに賛同する(佐竹靖彦『劉邦』488～489頁)。
- 58 施丁「陳下之戰与垓下之戰」(『中国社会科学院研究生院学報』1998年第6期)、「再談陳下之戰」(『中国社会科学院研究生院学報』2000年第6期)、「陳下之戰、垓下之戰是兩事—与陳可畏・辛徳勇商榷—」(『中国史研究』2003年第1期)。
- 59 漢王立為皇帝、賜益嬰邑三千戸。(灌嬰列伝)。
- 60 漢五年、布使人入九江、得数県。六年、布与劉賈入九江、誘大司馬周殷、周殷反楚、遂挙九江兵与漢擊楚、破之垓下。(黥布列伝)
- 61 至彭城、漢敗而還。至下邑、漢王下馬踞鞍而問曰「吾欲捐関以東等 弃之、誰可与共功者」。良進曰「九江王黥布、楚梟將、与項王有郗。彭越与齊王田栄反梁地。此兩人可急使。而漢王之將独韓信可属大事、當一面。即欲捐之、捐之此三人、則楚可破也」。漢王乃遣隨何説九江王布、而使人連彭越。及魏王豹反、使韓信將兵擊之、因拳燕・代・齊・趙。然卒破楚者、此三人力也。(留侯世家)
- 62 曹相国世家には「韓信為齊王、引兵詣陳、与漢王共破項羽」との記事があり、辛徳勇はこれにより韓信が陳下に参戦したことは確実とする(辛徳勇「論所謂“垓下之戰” 応正名為“陳下之戰”」162～163頁)。これに関しては、淮陰侯列伝に「召齊王信、遂將兵会垓下」とあることから、韓信は陳下の戦いの頃に高祖と合流し、垓下において黥布・彭越を含む全軍の集結が成ったものとみておく。
- 63 高祖置酒雒陽南宮。高祖曰「列侯諸將無敢隱朕、皆言其情。吾所以有天下者何。項氏之所以失天下者何」。高起・王陵対曰「陛下慢而侮人、項羽仁而愛人。然陛下使人攻城略地、所降下者因以予之、与天下同利也。項羽妒賢嫉能、有功者害之、賢者疑之、戰勝而不予人功、得地而不予人利、此所以失天下也」。高祖曰「公知其一、未知其二。夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房。鎮国家、撫百姓、給饋饟、不絶糧道、吾不如蕭何。連百万之軍、戰必勝、攻必取、吾不如韓信。此三者、皆人傑也、吾能用之、此吾所以取天下也。項羽有一范增而不能用、此其所以為我擒也」。(高祖本紀)
- 64 漢高祖の人物評価については、柴田昇「秦漢時代の賢と孝—戦国末期～前漢前半期の人物評価と人材登用—」(『地域と人間から見た古代中国(名古屋中国古代史研究会報告集2)』名古屋中国古代史研究会、2012、119～123頁)でも言及した。
- 65 誅籍。(秦楚之際月表・漢五年十二月・西楚)

- 66 都浙自立為王壯息……。 (高祖功臣侯者年表・堂邑)
- 67 使騎將灌嬰追殺項羽東城、斬首八万、遂略定楚地。(高祖本紀)
- 68 漢王因使劉賈將九江兵、与太尉盧綰西南擊臨江王共尉。共尉已死、以臨江為南郡。(荆燕世家)
漢五年冬、以破項籍、乃使盧綰別將、与劉賈擊臨江王共尉、破之。(盧綰列伝)
別定江陵、降江陵柱國・大司馬以下八人、身得江陵王、生致之雒陽、因定南郡。(靳歙列伝)
天下大定、高祖都雒陽、諸侯皆臣属、故臨江王驩為項羽叛漢。令盧綰・劉賈圍之、不下。数月而降、殺之雒陽。(高祖本紀)
- 69 臨江王驩始、敖子。(秦楚之際月表・漢三年八月・臨江)
- 70 漢虜驩。(秦楚之際月表・漢五年十二月・臨江)
属漢、為南郡。(秦楚之際月表・漢五年正月・臨江)
- 71 項王已死、楚地皆降漢、独魯不下。漢乃引天下兵欲屠之、為其守礼義、為主死節、乃持項王頭視魯、魯父兄乃降。始、楚懷王初封項籍為魯公、及其死、魯最後下、故以魯公礼葬項王穀城。(項羽本紀)
- 72 項羽死後の楚漢戦争及びその戦後処理に関しては、吉開将人「漢初の封建と長沙国」(『日本秦漢史学会会報』9、2008) 153～156頁でも言及されている。
- 73 本来は論功行賞の一基準に過ぎず軍を鼓舞するためのスローガンに類するものだった懷王の約が劉邦の正統性を保障する特別な約と位置づけ直されるまでの歴史的脈絡については、柴田昇「劉邦集團の成長過程」(『海南史学』51、2013) 6～7頁、10～11頁を参照。
- 74 王位に就いた者たちの中で唯一戦国王権との連続性を見出し得るのは、「故韓襄王檠孫」(韓信列伝)とされる韓王信である。しかし韓王信は韓王室と無関係ではなかったが、さして強い正統性をもった王とは認識されなかったようである。韓回復を目論んだ活動を続けていた張良が韓王信を支援するような動きを見せていないことはその一傍証となろう。
- 75 漢五年、既殺項羽、定天下、論功行封。群臣争功、歳余功不決。(蕭相国世家)
六年……上已封大功臣二十余人、其余争功、未得行封。(『漢書』高帝紀下)
- 76 柴田昇「劉邦集團の成長過程」14頁。
- 77 その結果、漢初の官僚制も上下の緊密な結びつきを欠いたものとなっていた。福永善隆は、前漢初期の官僚機構に上層と下層の別があり、「支配者階層が十分に下部の官僚機構に根付いたものではなかった」ことを指摘する。福永善隆「前漢前半期における清静政治の一背景—官僚機構の構造を中心として—」(『九州大学東洋史論集』42、2014) 11頁。
- 78 なお付言するならば、これらは漢が諸侯の盟主となり天下平定の主体として振る舞うことを可能とした条件であって、楚漢戦争における漢の勝利や、漢による統一の必然性を説明するものではない。楚漢戦争末期まで、項羽と劉邦の間に明確な優劣はついていなかったと考える。